

## 3

## 「3・11」と「雨ニモマケズ」

平成23年（2011）3月11日、東日本大震災は起こった。直後、岩手県を中心に被災地の人びとの間で「雨ニモマケズ」が注目された。この影響は日本のみならず、世界各国にも広がり、人びとは「雨ニモマケズ」を朗読した。

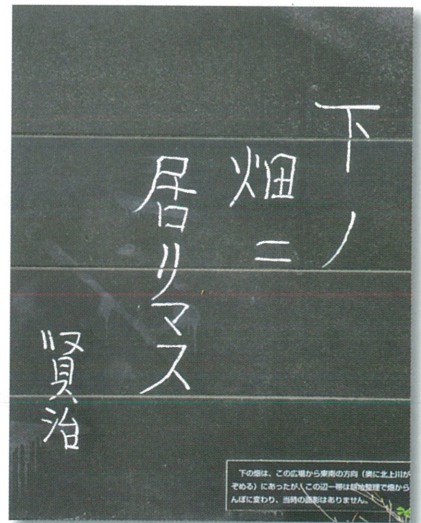
平成23年9月に開催された中央教化研究会議では、この「雨ニモマケズ」の作者宮沢賢治（1896-1933）をテーマにとり上げた。開催趣旨に次のようにいう。

大正3年（1914）に、賢治は法華経と出会いました。爾来百年を経過しようとして、ようやく、賢治の仏教思想、法華経受容が如何なるものであったのかが、広く一般に理解されつつあります。

そこに見られる、例えば、社会参加への姿勢や、或いは、超宗派性といったような特色は、まさに震災後一層顕著になっている、現代の伝統仏教教団が示しているすがたを先取りしていると言えるかもしれません。



羅須地人協会と黒板  
（平成23年5月撮影）



さて、「賢治の仏教思想、法華経受容が如何なるものであったのかが、広く一般に理解されつつあります」とあるが、その実情について、この中央教化研究会議の基調講演の中で、正木晃氏は次のように指摘している。

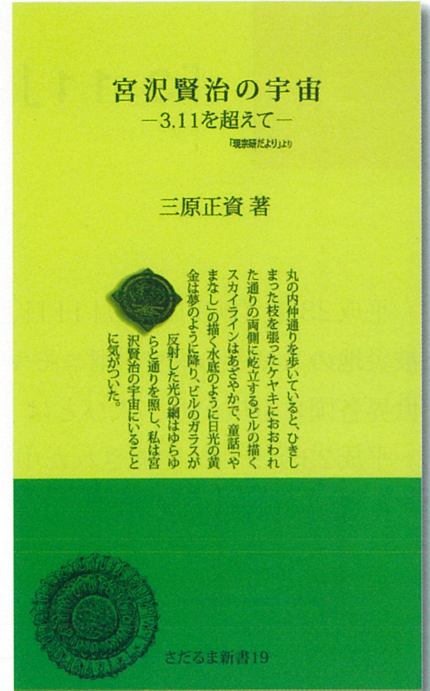
今回、『宮沢賢治イーハトヴ学事典』の仏教関連の項目の大部分を執筆するにあたり、先行する研究を調べてみて、わかったことがあります。文学関係の方々は、宮沢賢治と仏教の関係、とりわけ日蓮宗あるいは法華経信仰がひじょうに深く関わっているという事実を、ほぼ完全に黙殺してきたのです。それは驚くべきことでした。（『現代宗教研究 第46号』「宮沢賢治の仏教思想と復興の教化学」）

この中央教化研究会議の目的のひとつは、宮沢賢治の文学と仕事に「とりわけ日蓮宗あるいは法華経信仰がひじょうに深く関わっている」ことを教師に理解していただきたかったことである。

加えて、「3・11」以後、顕著になった宗教者の社会活動の意味を、深く考えるためだった。

（理想世界）イーハトヴ実現のために、賢治は羅須地人協会＝農民塾を開いたといえよう。この活動の舞台となった宮沢家の別宅は、現在、岩手県立花巻農業高校の前庭に移築され、大切に保存されている。この建物の前に佇むと、彼が地元の人びとに今もつよく敬愛されているを感じる。（略）「雨ニモマケズ」は、イーハトヴを実現しようとした賢治の願いと実践が示されたものであり、そこには法華経の菩薩行が表現されている。（基調報告）

菩薩行の大切さは、もとより教師は自覚していると思う。ところで、この菩薩行を社会参加活動、身近な「地域コミュニティへの取り組み」ととらえるとき、『人口



『宮沢賢治の宇宙（『現代宗教研究』より）』  
（さだるま新書／平成24年5月31日発行）

減少時代の宗門一宗勢調査にみる日蓮宗の現状と課題一』（現代宗教研究所 平成26年）が次のような分析を試みていることを、どう受けとめたらよいだろう。

檀家数の多いお寺ほど、檀家数が増加し、後継者が存在し、地域社会との交流に取り組んでいる、というのが、宗勢調査によって浮き彫りになった事実でした。（略）

寺院を活性化するのは、無論、まず第一に教師の「志」「やる気」ですが、教師の「やる気」のみでは限界があり、一定の規模を確保し、寺院の財政的規模を安定させ、「やる気」を醸成し、「やる気」を具現化する施策が求められる、と言うべきでしょうか。

多くの人が自覚している大切な菩薩行を、いかにしたら宗教者の社会参加として、組織的、継続的に実現できるか。これこそは、教団の「運動」につきつけられた課題である。当然のことながら教師一人ひとりの資質の問題でもあることは言うまでもない。

教化の基は信仰であり、信仰の基となるのは、法華経と出会った時の、感動、感激です。これなくして、教学も教化もありません。熱心な門徒の家に生まれた賢治が、法華経に触れ、目覚めた、その感動を、私たちも共有し、明日の教化につなげて行きたいものです。（開催趣旨）

本当に一人ひとりの〈信仰〉〈感動〉が求められている。しかし、そのためには何が必要なのか……ほりさげてゆきたい課題である。

## お題目を唱えて仏になる

法華經に出会えた喜びや感動はいったい何に根ざすのでしょうか。それは、自分も仏になれるという確信にあると思われます。

法華經を信じるとは、必ず成仏できると心から信じることであり、仏様はいつもそばにいらっしやると心から感じることに他なりません。法華經を信仰して、そのような安らぎと幸福を得られることが、法華經とお題目の功德です。

宮沢賢治の生涯は、申し分なく恵まれた生涯だったとは決して言えないでしょう。生前に世間的な名声や評価を得たわけではありません。にもかかわらず、彼の人生は安らぎに満ち、真に幸福なものであったはずです。それは賢治が法華經の行者として、高邁な理想をもって菩薩行に生きて法華經の功德を得たから、いしかえれば、法華經を心から信じて成仏することができたからです。

法華經における成仏とは、現在のこの身のままに仏になれる、という即身成仏です。その具体的なありかたは、「現世安穩後生善処」という安心の境地に至ることです。

正しい信仰と法華經の修行により善根功德を積みめば、必ず後の世は善き処に生じる、と心が定まることにより、この苦しい娑婆世界も安穩な世界となります。また後の世に心を留めて善処に生じることを願い、今生で法華經の修行をして、現世の欲望や執着から解放されれば、それはまた現世安穩の境地にいたることができます。この世のすべては仏さまのおはからいである。なぜなら仏様はいつもそばにいてくださるのだから。このように深く確信することができれば、穢れて苦しい娑婆世界が、そのまま寂光浄土として顕れてきます。そのときには、自分を含めた衆生は悉く成仏し、国土世間もまた成仏しています。そのような境地にいたることが、今生における真の幸福です。

以上のような尊い境地は、決して机上の空論ではなく、強い信仰による実践修行により、たしかに得られる境地なのです。賢治もまた生涯において、その尊い境地に達したことでしょ。う。